

首都大学東京ボランティアセンター 設立1周年記念シンポジウム

わたしたち
大学生がつくるレガシー 2020とその後にも残るボランティア文化の構築をめざして



わたしたち
大学生がつくるレガシー

2020 とその後にも残るボランティア文化の構築をめざして

3月4日（土）、南大沢キャンパス講堂小ホールにて、本センターの設立1周年記念シンポジウムを開催しました。本センターは、2016年1月に開設され、この1年で、多くの学生が地域に飛び出し、社会課題と向き合い、考え、行動することを通して、学び、成長してきました。そこで、1年間の学生たちの活動成果や想いを振り返り、共有することで、ボランティア活動の意義や効果を多角的に考えるとともに、まだ活動したことがない学生にむけて、ボランティア活動を身近に感じ、一歩を踏み出すことを応援する場として、本シンポジウムを開催しました。

第1部 活動成果報告会

第1部では、「ボランティア活動に取り組んだ首都大生による活動成果報告会」を開催しました。本センターが実施した「スポーツボランティアプログラム」「地域ボランティアプログラム」に参加した学生や、本センターの学生コーディネーター、登録団体など合計7団体が発表を行いました。第1部は、進行や運営も学生コーディネーターが行い、すべて学生による手づくりの報告会でした。

【発表団体】

1. スポーツボランティアプログラム
2. 都市防災・災害復興研究室
3. ボランティアセンター学生コーディネーター
4. & TMU
5. 東日本きずなプロジェクト
6. 地域ボランティアプログラム
7. 応援団リーダー部

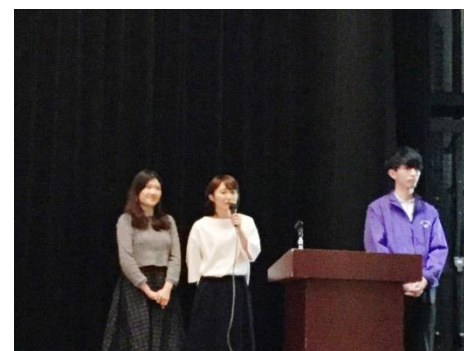
活動の目的や内容、学んだこと、課題などについて発表がありましたが、どの団体も自分たちの言葉で想いを一生懸命話す様子が印象的でした。また、それぞれ地域の方や団体とつながり、深く入り込み、楽しんで活動している様子が伝わってきました。課題や今後の展開についても語られ、現状に満足せず、さらなるビジョンをもって取り組んでいることが分かりました。

会場の参加者からは、多くの質問・意見が寄せられ、学生の活動への関心の高さを感じましたし、連携団体の方からも温かいコメントをいただき、学生の取組が地域の力になっていると感じました。発表した団体同士も今回、初めてお互いの活動を知ったようで、お互いの活動に参加するなどコラボ案も生まれ、今後、さらに期待が高まります。



首都大学東京 ボランティアセンター 設立1周年記念 シンポジウム

2017/3/4



第2部 パネルディスカッション

第2部は、障がい者スポーツに焦点をあて、「大学生（わたしたち）がつくるレガシー 2020とその後も残るボランティア文化の構築をめざして～障がい者スポーツの魅力と大学生にできること～」をテーマに、パネルディスカッションを実施しました。

【パネリスト】

《進行性筋ジストロフィーという難病を抱えながら電動車椅子サッカーを楽しむプレイヤーの立場から》

猪瀬 剛 氏（特定非営利活動法人
ライフアシスト Familish 理事）

《「首都大スポーツボランティアプログラム」を通して、障がい者スポーツのボランティアに関わる学生の立場から》

神保 彩乃 氏（首都大学東京 都市教養学部 経営学系 1年生）

《「首都大スポーツボランティアプログラム」のパートナー団体として、学生ボランティアを受け入れコーディネートする立場から》

横田 篤志 氏（公益社団法人東京都障害者スポーツ協会事業推進部 事業推進課 主任）

《大学や学生と連携し、さまざまな取組を実施している地域のボランティアセンターの立場から》

宮崎 雅也 氏（社会福祉法人日野市社会福祉協議会 日野市ボランティアセンター 主任）

【コーディネーター】

室田 信一 氏（首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 社会福祉学分野 准教授、ボランティアセンターアドバイザー）

【コメンテーター】

信太 奈美 氏（首都大学東京 健康福祉学部 理学療法学科 助教、ボランティアセンターアドバイザー）

パネルディスカッションに入る前に、猪瀬さんを含めた3人の方による電動車椅子サッカーのデモンストレーションを行っていただきました。電動車椅子の前にフットガードを取り付けて、その部分でボールを操作するのですが、とても早いスピードと繊細な操作で繰り広げられるパスやドリブル、回転シュートなど華麗で迫力あるプレイに、会場中が引き込まれていきました。



続いて行われたパネルディスカッションでは、猪瀬さんからは、電動車椅子サッカーも生活の一部であること、ボランティアとの出会いによって、自分をさらけ出すことができるようになり、自立を考えるきっかけになったことなどをお話いただきました。

次に、横田さんからは、今年度、首都大生が関わらせていただいた東京都障害者スポーツ大会のボランティアの概要についてご説明いただき、「する」「知る」「支える」観点から共に素晴らしい時間を共有することができる、障がい者スポーツのボランティアの魅力について、お話しいただきました。

学生の神保さんからは、横田さんの話を踏まえて、障がい者スポーツボランティアに参加したきっかけやその魅力、活動を通して感じたことなどについて、お話しいただきました。

宮崎さんからは、障がい者スポーツに留まらず、大学生の主体的な思いから生まれた取組や大学との連携事例の紹介を通して、ボランティア活動における大学生・地域・大学それぞれのメリットについて提起していただきました。

ディスカッションでは、猪瀬さんや会場の参加者から「障がいのある成人の方と関わるボランティアを見つけることが難しい。学生にとって壁があるのではないか」という問題提起をいただき、議論しました。神保さんからは、「自分自身は抵抗はないが、接する機会がないことで距離ができてしまうのではないかと。難しいことではなく、私たちにもできることがあるというイメージが広がるとよいのではないかと」という意見が述べられました。また、横田さんからは、「一見、違う分野や活動とコラボすることにより、関わってもらえる人を増やすことができるのではないかと」という提案もいただきました。また、「2020年に向けて、パラリンピックというブームにのって、それをきっかけに障がい者問題を考えるきっかけになれば」「学生一人ひとりがアクティブになることで、大学全体が活性化する」といった意見もありました。

これまで、障がいのある人と接する機会がなかった学生が、東京2020オリンピック・パラリンピックを機に、例えばスポーツを切り口に障がいのある方と関わりをもち、知ることで壁

を取り払うことができ、スポーツ以外の普段の暮らしを支えるボランティアにもつながる・・・それこそが2020年以降にも残るボランティア文化の構築につながるのではないかと期待が高まりました。

おわりに

当日は、本学の学生や教職員、他大学のボランティアセンターの方、連携団体の方、障がい者施設の職員の方、障がいのある方、一般市民の方など、学内外から98人の方にお越しいただきました。学生の生の声をたくさん聴くことができ、地域からの期待の声を多くいただき、温かく充実した場になったと感じています。この1年多くの方々に支えられたボランティアセンターだったと改めて実感することができました。

東京2020オリンピック・パラリンピックまで、あと3年半。ボランティアセンターは、「イメージや心理的な壁」「分野や団体の壁」など、様々な壁を取り払い、学生たちが主体的に社会課題と向き合うことができるよう、今後も応援していきたいと思っております。そして、そのことが東京2020大会の成功やより良い首都東京をつくることにつながることを感じたシンポジウムになりました。

